
感想文・未推敲

和田 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感想文・未推敲

【Nコード】

N07380

【作者名】

和田 光

【あらすじ】

読書感想文。

夏休み最大の敵。

嫌いな先生と怖い母親。

読みたくもない本の内容なんて、いくら読んでも頭には入らない。感情もわかないし、感想も、無い。私にとって『アリババと40人の盗賊』がそうだった。

夏休みの終わりは世界の終わりだ。僕にとって、みんなにとって、全てのだらけた小学生の諸君にとって。

8月31日は地獄だ。

この日だけは、無敵で、自由であった僕も大人しく机に向かう。一生懸命、一からこなしでいこうなんて考えは、しない！

頭の中にあるのは、誰が手伝ってくれるか、誰なら写させてくれるか、だ。

国語はお母さんだな、うん間違いない。

餅は餅屋、プロはプロ屋。

算数は算数ドリルだったなあ……答えは先生に回収されている。

だけど！小遣いをはたいて、同一の算数ドリルを本屋さんで買っている。

ぬかりはない。

理科と社会は伊藤君だな、伊藤君なら教えてくれる！

あいつが持っているじゃないスーパーファミコンのソフト、それで手を打つてくれるだろう。

これで主要科目は大丈夫。

さあ、作業に入らなければ時間がない。

夜。

全てを完遂させた。

新学期の案内、そこには9月1日審判の日を持っていくべきものが

記載^{きざい}1されている。

チエックマークを一つずつ入れていく。

算数ドリル、漢字ドリル、理科・社会の問題集、読書感想文。
読書感想文？ドクシヨカンソウブン？

そんなのあつたっけ……

書かれている以上、提出しなければならぬのは確か。

そうだ、そういえば『アリババと40人の盗賊』だ！

たしか先生がそういう話をしていたのは覚えてる。

本棚のどこかに消えたその本を探す間に、楽できる術も探す。

けれども、こればかりは他人のを写すわけにはいかない。

流石の私でもそれだけは躊躇^{ちゆうじゆ}1する。無理、無理。

なんの対策も浮かばず、30分後には膨れっ面で本を読む私。

ちゃちゃつと話を抜き出し、くつつけるだけの作業。

まー、文章も変じゃないし、大丈夫だろう。

間違つてたりしないか、母上様に確認してもらおう。

こんなもんじゃない？そんな言葉あたりをいただく、そう軽く考えたのが間違이었다。

「あんだ、これ、あらずじ書いてるだけやん」

見せなければよかった。そのまま何事もなく、宿題として提出すればよかった。

「読書感想文になつてない、書き直し、ボツ」

私の努力と怠惰の結晶である1枚の紙は、無残に丸められ、そしてゴミ箱へ。

一度置かれた監視は、完成するまで解けることは無い。

「できたの？みしてみ」

そう言われるのは当たり前のことだから。

結局、読書感想文、使える感想だけを残して、どんどん削られていった。

「ぼくは、とうぞくからざいほうをぬすんだアリババもどろぼうだ

と思いました」

残ったのはそれだけ。

自分では本当にこれだけしか思えなかった。

ほかの適当な言葉は全部消された。

もう、心身ともにすごい疲れていた覚えがある。

たった3行、タイトルいれて4行、名前いれて5行、絶望的だ。

しかし、鬼の母上は更に恐ろしい事を言い出す。

神に逆らう、神をも恐れぬ一言を。

「よし、これでいい、これ提出しな」

私はこれを提出したことにより、先生にどう怒られるか、どう叱られるか。

まどろみながら、そう考えていたと思う。

母が、これでいい、それだけで心強く、疲れと安心感でそのまま私は眠ってしまった。

ずっとびくびくしていた。

そしたらやっぱり呼び出された。

僕は担任の先生が嫌いだった。

みんなからも、怖がられ、逆らってはいけない象徴。

いつも何かに怒っていた。

僕のお母さんも担任が嫌いだった。

子供の悪口ばかり言うから。

呼ばれた理由は読書感想文のことだった。

どうしてこんな状態で出したのか？

なぜ、もっと書かなかったのか？

宿題する気があるのか？

一つ一つ、理解できる時間もなかった。

気づけばいつのまにか泣いていた。

お母さん - - - - -!!

学校の先生に呼び出された。

ああ、なかなか早かったじゃない。

最悪授業参観の時まで伸ばされると思っただけ。

下準備はバッチリしてある、問題ない。

息子の教室に入ると、先生と、そして息子がいた。

私はこの先生が嫌いだ。

何事も自分の感性で測る、典型的な先生至上主義者。

「お母さんもね、しっかりしてくださいよ！」

きつと、そんな事をいつてくるに決まっている。

自分の価値観に合わない者には叱責を与える。

だから息子は私に読書感想文を見せた。

母親として、私は先生より格上でなければならぬ。

じゃないと、私の育て方が否定されてしまう。

悪戯好きで、ちよつと怠慢になっただけ、いい子に育てた。

そう自分で自分を誇れるように。

「これはどういうことですか？お母さん、ご確認ください！」

「いえ、結構です。内容は存じております」

食って掛かる先生に、しれつと答える母。

「それでは、このまま出すことを了承なされたのですか？」

「はい、そうですけども」

先生の顔は赤くなり、目つき悪く母を見据えた。

「他のお子さんはもっと多く書いてます」

「多く書けばいい、そういうものでしょうか？」

「すぐ、気まずい。ここにいなくちゃいけないのがつらい。

「やはり、多少は『書く』という努力も必要なんです！」

「それでは、これで満足いただけますか？」

そういつて母はしわしわになった何十枚もの紙を出した。

僕が書いた感想文だ。捨てられたかと思っただ。

「私が言うのですから間違いないありません、この3行でいいんです」

「学年の栞などに、この文章が載りますが、構わないんですか……？」

「ええ、結構」

「お母さん、あんなこと言って大丈夫かなあ？」

「うん、大丈夫やで」

「僕はいいけど、お母さん先生と喧嘩しちゃったやん」

「昔からあんたの先生、嫌いやねん」

「そうなんや、僕も嫌いやねん」

帰り道、お母さんごめんなど言ったら、そういう時はありがとやと叱られた。

そして私の読書感想文が、学年の栞にのった。

私は栞を配られた日、クラスの笑いものになった。

先生が、こいつみたいに文章少ないとな、恥ずかしい思いするからな。

そう言った。そう言われた。

同級生は、いつもの先生の嫌がらせと判っているから、大して気には留めてなかった。

一部のやつらから、俺のおかんがお前のおかんのこと、こついつてたぜ！

とか、アホらしい罵倒を受けたのは確かだけど。

三者面談の内容も含まれていたから、漏れたとしたらやはり先生なんだろうな。

しかしその3日後、母がエッセイで大賞を獲る。

短さを晒された文章に、黄金色の箔がついた。

もう、誰も馬鹿にすることはなかった。

ずばっと核心を突くところがいい、だとかアリババも泥棒と捉えるところが斬新、とか。

全部が180度変わった。

それくらい、片田舎の小学校では噂が広まるのは早かった。

「お母さん、有難う！お母さん、僕のために賞とってくれたんやね！」

「有難うちゃう、おめでとうやる？あんたの為に賞とったわけじゃないからね」

「前の読書感想文のことあったから、賞とったんじゃないの？」

「そんなくらいで獲るわけないやろ？ついでや、ついで。そんな理由で1等獲れるほど甘くないで？」

「んじゃどうして1等とったん？」

「どうして1等とったん、って聞き方おかしいけど、まあ、1等が1番賞金多いからやで」

「……こうなることわかってたん？」

「こうなるやるな、とは思ってたよ」

「よくそんなんわかるね、1等選ばれるとか、全部こうなるとか」「それがわかるから、こうしたんやんか、あんたもあほやなあ」

母は強い、敵にしたら怖い。

そんな怖い母だけど、ぼくはかっこいいなと思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0738o/>

感想文・未推敲

2010年10月10日00時51分発行